

もそも、これら「読解力向上プラン Ver. 1」に示した項目は教員にとってはどれも基本的な事柄であると言えるが、児童生徒の読解力を高めるために大切なこととして、今後も折に触れ再確認していく必要があると考える。

表3 研究協力校における教員アンケートの結果の推移

		肯定的回答	
全体	「読解力向上プランVer. 1」を見たことがありますか。	75.2%	→ 89.7%
		肯定的回答	
「はじめの一歩」	(1) 読書の推進に取り組んでいる。	80.3%	→ 93.1%
	(2) どの教科の指導においても、児童生徒に教科書などを声に出して読ませる機会をもっている。	88.2%	→ 85.1%
	(3) 児童生徒に視写や聴写をさせる機会をもっている。	80.3%	→ 77.0%
	(4) 筆算や実験・観察、調理など、児童生徒に正しい手順で正確に処理させるような機会をもっている。	82.9%	→ 88.5%
「指導のポイント」について	「指導のポイント」に取り組んでいますか。	67.1%	→ 82.8%
	取り組んでいる項目（上記質問に「取り組んでいる」と答えた回答者。複数回答可。）		
	① 主語と述語を明確にして、見たことを短い文で説明させる。	15.8%	→ 36.8%
	② 身近な自然に接する時間をとり、対象をじっくり観察させる。	19.7%	→ 17.2%
	③ 言葉や文と、絵や図とを対応させて考えられるようにする。	31.6%	→ 34.5%
	④ 学習のめあてに沿った振り返りやまとめをさせる。	34.2%	→ 46.0%
	⑤ 記述式の解答が正答例と同義であるか判断させ、同義になるように修正させる。	6.6%	→ 6.9%
	⑥ 見たことを正確に文章にしたり、絵に描いたりする活動をさせる。	21.1%	→ 17.2%
	⑦ 図や表、グラフを活用して文章等にまとめさせる。	11.8%	→ 19.5%
	⑧ 「～を・・・という」のような定義文を全員で確認するようにする。	3.9%	→ 18.4%
	⑨ 知識を暗記させるのではなく、意味を理解できるよう、理由を口頭で説明させたり、具体例を挙げて説明させたりする。	13.2%	→ 31.0%
	⑩ 主観的な表現（～と思った、～がおもしろかった等）を制限し、論理的に考え、表現させる。	6.6%	→ 8.0%
	⑪ 「とても」「すごく」「よかった」などの定型的な言葉を使わずに文章を書いたり話したりさせる。	1.3%	→ 8.0%
	⑫ 人に何かを伝えるときには、見たことや聞いたこと、考えたことを省略せずに丁寧に説明させる。	9.2%	→ 26.4%
	⑬ 簡条書きを使って、時系列で客観的に手順を説明させる。	11.8%	→ 16.1%
	⑭ 既存の知識と習得した知識を活用して論理的に説明させる。	2.6%	→ 17.2%
⑮ 用語の定義を理解させ、「とは」を使って説明させる。	3.9%	→ 8.0%	
⑯ 複数の段落で構成された文章を200字程度でまとめさせる。	7.9%	→ 5.7%	
		肯定的回答	
「先生が心がけてたいこと」	(1) 教科書の中の、児童生徒が理解できないと考えられる語や表現を確認してから授業に臨んでいる。	93.4%	→ 97.7%
	(2) 教科書の図や表、グラフなどが、文章のどの部分と結び付いているかを確認してから授業に臨んでいる。	93.4%	→ 96.6%
	(3) 各教科等に特有の学習用語を使うときは、定義を児童生徒と確認してから使っている。	89.5%	→ 100.0%
	(4) 児童生徒の話を遮ったり簡単に引き取ったりせず、最後まで話をさせることを心がけている。	94.7%	→ 96.6%

※着色部分は数値が上昇した項目を示している。

※アンケートは4件法で実施した。

4 令和5年度のRSTの結果

(1) モデル地域の結果の概要

10月26日から12月15日の受検期間に、受検対象者のいない1村を除く南部・東部地域18市町村において、小学6年生774人、中学2年生786人、合計1,560人がRSTを受検した。RSTにおいては、受検者の「汎用的基礎読解力」が、「係り受け解析」「照応解決」「同義文判定」「推論」「イメージ同定」「具体例同定（辞書・数理）」の6分野7項目別に測定される。

6分野7項目別の児童生徒の平均偏差値を見てみると、小学6年生については、いずれの項目においても標準的と言える結果を示しており、「イメージ同定」「具体例同定（辞書）」では比較的高い値が出ている（図3）。文章と図表等を結び付けたり、言葉の意味を理解したりして読むことができていく児童が多いことが分かる。

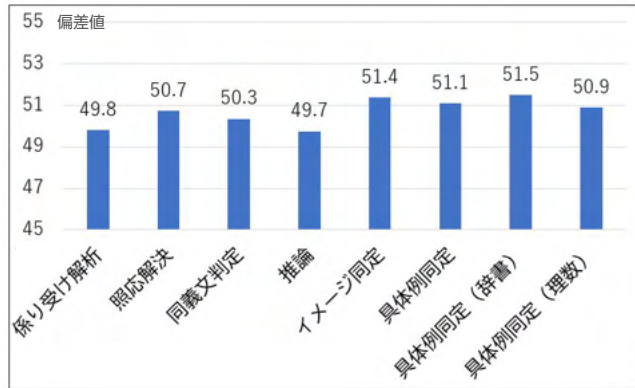


図3 小学6年生の6分野7項目別平均偏差値

一方、「係り受け解析」「推論」については課題が見られた。各項目の偏差値分布を見ると、「係り受け解析」では約14%、「推論」では約15%の児童が偏差値40未満であり、児童によって力にばらつきがあることも分かる（図4、図5）。

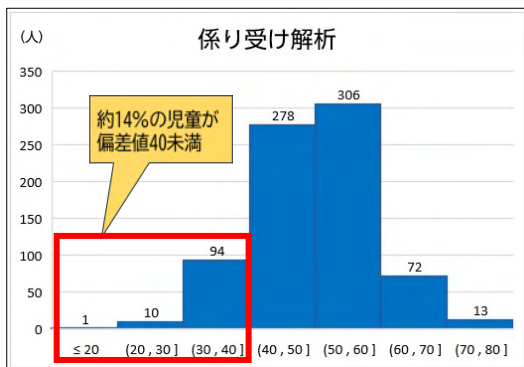


図4 小学6年生の偏差値分布（係り受け解析）

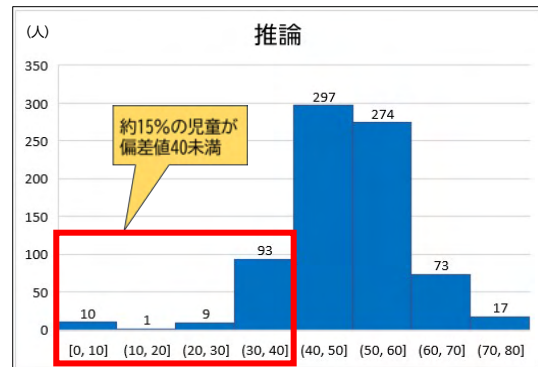


図5 小学6年生の偏差値分布（推論）

中学2年生についても、「イメージ同定」と「具体例同定（辞書）」が、他の項目と比べて比較的良好な結果であった（図6）。ふだんから授業の中で、図表と文章を結び付けて読むことや辞書的な言葉の意味などを丁寧に確認しながら授業をしている成果と考えられる。一方、それ以外の項目では、課題があることが読み取れる。偏差値分布からは、「係り受け解析」で約21%、「推論」では約23%の児童が偏差値40未満であり、小学6年生と比べてよりばらつきがあることが分かる（図7、図8）。「係り受け解析」と「照応解決」は、いずれも「汎用的基礎読解力」の基本的な部分であるとされており、まずはこれら

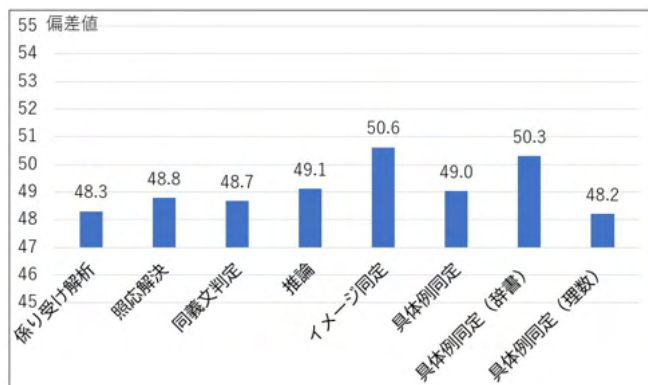


図6 中学2年生の6分野7項目別平均偏差値

の力を育むことに重点を置く必要があると考えられる。

(2) 研究協力校のRSTと全国学力・学習状況調査（国語科・算数科）結果

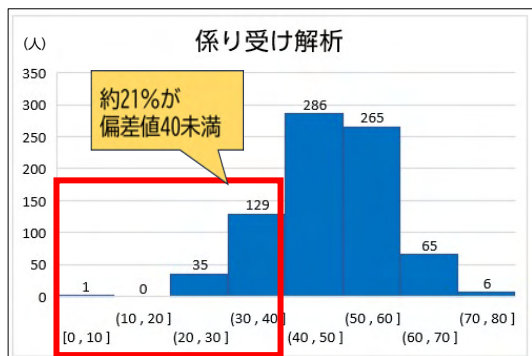


図7 中学2年生の偏差値分布（係り受け解析）

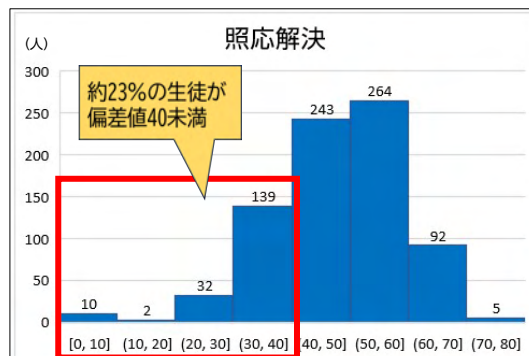


図8 中学2年生の偏差値分布（照応解決）

研究協力校のうち1校において、6年生の児童101人の6分野7項目ごとのRSTの結果と、全国学力・学習状況調査（国語科・算数科）の設問ごとの解答状況の相関係数（ r ）を算出し、効果量として分析した。Cohen(1988)が提唱した基準によると、効果量（ r ）が0.1未満だと相関なし、0.1以上だと小さな相関、0.3以上だと中程度の相関、0.5以上だと大きな相関があると言える。なお、分析に当たり、RSTの結果については、教育のための科学研究所から提供された5段階評価のAを5、Bを4、Cを3、Dを2、Eを1とおき、全国学力・学習状況調査の解答状況については、正答を5、誤答を1とおいた。

その結果、二教科ともほとんどの設問でRSTの結果との間に相関が見られたが、特に算数科の各設問において相関が大きいことが認められた（資料3参照）。中でも、大問3の設問（2）は、「具体例同定」「具体例同定（辞書）」との間に大きな相関が、その他の項目についても中程度の相関が見られた。この設問は、厚さの異なる3種類のファイルを23冊ずつ並べた際の長さの求め方を式や言葉を使って文章で書くものであり、正解するためには、問いの設定を問題文から正確に読み取り、自分の考えを適切な言葉を用いて順序立てて書く必要がある。また、同じく記述式の設問である大問4の（3）においても、6分野7項目全ての中程度の相関が見られた。「読解力」とは、読むことを学習の中心とする国語科のみに関わるものではなく、本プロジェクトを通して「汎用的基礎読解力」を育むことで、各教科で付けたい力の育成につながることを確認できたと言える。

令和5年度 調査問題 小学校 算数 大問3(2)

けんたさんの学級では、1人が3種類のファイルを1冊ずつ使うことにしました。それぞれのファイルの厚さは1.4cm、1.6cm、2cmです。けんたさんの学級の人数は23人です。

下のような、はば120cmのたなに、ファイルを全部並べて入れることができるかどうかを考えています。

3種類のファイル23人分を全部並べた長さは、何cmですか。全部並べた長さの求め方を、式や言葉を使って書きましょう。また、答えも書きましょう。

さらに、たなにファイルを全部並べて入れることができるかどうかを、下の1と2から選んで、その番号を書きましょう。

1 入れることができる。 2 入れることができない。

令和5年度 調査問題 小学校 算数 大問4(3)

あいかさんたちは、左の2つのグラフをもとに、気づいたことについて話し合っています。

どちらのグラフも「0日」、「1日」、「2日」の人数が多いということが同じですね。

でも、2つのグラフをくわしく見ると、ちがうところもありますね。

そこで、あいかさんたちは、日数に着目して、2つのグラフのちがうところを、次のようにまとめました。

【「0日」についてまとめたこと】

「0日」に着目すると、次のようなちがいがありません。6年生のグラフでは「0日」の人数が1番目に多く、5年生と6年生を合わせたグラフでは「0日」の人数が3番目に多いです。

【「0日」についてまとめたこと】と同じように、「日」に着目してまとめると、どのようになりますか。下の□の中に、「6年生のグラフ」、「5年生と6年生を合わせたグラフ」、「番目」の3つの言葉と数を使って書きましょう。

図8 令和5年度 全国学力・学習状況調査 小学校 算数科 問題文

表4 全国学力・学習状況調査（算数科）の各設問とRST6分野7項目との相関係数

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定	具体例同定(辞書)	具体例同定(理数)
3 (2)	0.406**	0.464**	0.370**	0.430**	0.470**	0.534**	0.504**	0.463**
4 (3)	0.366**	0.383**	0.366**	0.320**	0.343**	0.474**	0.353**	0.441**

**は1%水準で有意（両側）

5 今年度の取組から見えてきた課題と来年度の展望

RSTの結果から、南部・東部地域全体の傾向として、読解の基礎とされている「係り受け解析」「照応解決」に課題が見られることが分かった。2年目となる令和6年度は、「読解力向上プラン」の中の「係り受け解析」及び「照応解決」に関わる指導のポイントを重点的に意識して指導していく必要があると考える。

また、研究協力校の教員を対象とした「読解力向上プラン Ver. 1」についてのアンケート結果からは、プランについての理解の深まりや、指導のポイントなどを指導に取り入れようとする意識の高まりは見られる一方で、授業等にあまり取り入れられていない項目があることも分かった。

これらのことを踏まえ、「読解力向上プラン Ver. 1」の各指導のポイントについて、内容や文言をよりイメージしやすいものになるように修正し、また、RST実施により見えてきた課題の克服のための取組が明確になるように、6分野7項目ごとに整理し直したものを「読解力向上プラン Ver. 2」とすることとした(資料4参照)。

プロジェクト2年目となる令和6年度は、この「読解力向上プラン Ver. 2」を活用し、モデル地域での授業改善に取り組み、各指導のポイントと関わりの深い教科や単元を探るなど、より具体的な研究を進めることで、「奈良県版読解力向上プラン」の完成に向かっていくこととしたい。

参考・引用文献

- (1) 中央教育審議会（平成3年）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申） p. 3
- (2) 教育のための科学研究所「リーディングスキルテストとは？」
<https://www.s4e.jp/about-rst>
- (3) 国立教育政策研究所「令和5年度全国学力・学習状況調査 解説資料（小学校 算数）」
https://www.nier.go.jp/23chousa/pdf/23kaisetsu_shou_sansuu_2.pdf
- (4) 新井紀子（2018）『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社
- (5) 新井紀子（2019）『AIに負けない子どもを育てる』東洋経済新報社